

みのむし●鈴木陽美

特急の青いシートの背もたれを起こしてつくるよそゆきの顔

「ものわすれ外來」二階の奥にあり窓の光が叔母の背を押す

ひとつずつ○つけながらしたたえの問診票にうかぶ半生

心よりからだが老いてからだより脳が老いて「今日は火曜日?」

付き添いのわれは家族にあらざれば「親戚です」とおずおず告げる

空白の家族の欄にことごとくわれの名前を埋めるほかなく

ひとり居に危ぶむ自己放任料理も掃除もしない明け暮れ

番号を忘れて電話のかけられぬ友のいるらし聖書の会の

「寂しいと死んでしまう」の俗説を信じた兎がいたかもしがれず

舞台より舞台の裏が広いことふつと思いぬ五月の空に

繰り返す姉への不信を聞きながら狂い始める体内時計

体温計こころにあてれば平熱の低い人だとわれは言われむ

うつすらと嘘が透けるか零したる言葉を紙に写してみたら

貧弱な家系図の枝先に揺れるばかりの蓑虫のわれ

飛ぶことを風に任せた種ならば語り継ぐべき何ももたざり

荒っぽい口調の答える愉しさよ人生相談新聞に読む

ダイソーに買うピルケース服薬の管理おぼつかない叔母のため

ひいやりと舌の喜ぶせいろ蕎麦ちよつと多めに山葵利かせて

揺らがざる心こそ欲しほつ夏の雨に濡れ立つキリンのよう

どこへ行く旅なのだろう 夢にまた山吹色の電車が見えて